

ミステリ読書案内

2024. 8. 14 発行元

第597号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

トニー・ケンリック「ベスト表」(再掲)

典型的なアメリカ・ミステリと思っていたら、トニー・ケンリックはオーストラリア生まれの作家だった。まだ存命のようだが、不思議なことにミステリ作品は1990年以降日本の記録には登場してこない。

《トニー・ケンリックのベスト表》

1. リリアンと悪党ども
2. 殺人はリビエラで
3. バーニーよ銃をとれ
4. スカイジャック
5. マイ・フェア・レディーズ
6. 暗くなるまで待て
7. 俺たちには今日がある
8. 消えたV1発射基地
9. 誰が為に爆弾は鳴る
10. 上海サプライズ
11. 三人のイカれる男
12. チャイナ・ホワイト

ネット上で調べてみると、ケンリックの全作品としては14作しか載ってなくて、1980年代後半以降はどうしたのだろうと疑問に思った。パタッと書くのをやめたしまったのだろうか。1935年生まれなので、まだまだ活躍の期間はあるはずなのに。別の機会にでも調べてみようかと思う。

ユーモアに満ち溢れた作品

私以外の人だったなら特集記事にトニー・ケンリックを取りあげないかもしれない。でも、私は若いころに大いに楽しませてもらった思いが強いので、こうして特集を組んでいるわけである。

作風はユーモア・ミステリ。スラップスティックのドダバタ系。でも、よく考えられた設定で読者の想像を超える展開にどの作品でも驚かされる。その思い付きの奇想天外さに魅力があると言える。

右に『ベスト表』を載せてみた。表に載っていない『ネオンタフ』は買ってはあるものの長年私の本棚の中に入ったままだ。ケンリックの作品の中で一番厚い本。いずれも角川文庫に納められている。

世間的には『スカイジャック』が一番知られていて、代表作として取り上げられることが多い。私としてはそれよりもドダバタ色の強い『リリアンと悪党ども』の方が好きだ。ということで、下にはその本を取り上げてみた。古書市場でそんなに出回っているようではないが…。

「リリアンと悪党ども」

1975年の作品。私の手元にあるのは1980年の角川文庫。上田公子の訳だ。桜井一のカバー絵が印象的。舞台はアメリカ・ニューヨーク。物語の中で語られる人々の動きや会話はまさにアメリカの雰囲気満ち溢れている。アメリカならこんなことも起こりえるだろうと…。

旅行会社の会社員・バンニー・コールダーがある朝出勤したところ、ひよんなことからエラ・ブラウンと夫婦になり、9歳の娘・リリアンと億万長者の三人家族になるという思いもしないような出来事から始まる。もちろんそれはある作戦上のこと。このリリアンがまた強烈で、今の時代ならとうていありえないことなのだが、子どもなのに常に煙草を口にくわえているのだ。みなし児でありながら過激な行動力の持ち主。バンニーとエラも振り回されがち。この仮想の家族に与えられた使命は、リリアンをある組織に誘拐させようというもの。そして登場して来る誘拐組織の方もどこか抜けたところがあるようで…。ハラハラドキドキのサスペンスでありながら、コメディ劇が進行していく。果たしてゲームを狙ったところに持っていくことができるのか…。

追悼・齋藤栄

6月下旬の新聞に齋藤栄の訃報が載っていた。扱いは思いの外小さかった。第581号で特集をくんだばかりなので、今回は一冊だけを紹介する。

「鎌倉流鎗馬殺人事件」

1986年カッパノベルス書下ろし。私の手元に齋藤栄の本はあまり残っていない。引っ越しのたびに古書店に出してしまったからである。もし全部残っていたなら本棚のかなりの部分を占めることになっただろうが…。本書は第581号に載せた『ベスト表』に登場しないくらいの平均的な作品。『タロット日美子シリーズ』の一作。「鎌倉」が舞台というのは齋藤栄の得意技のひとつ。

日美子は友人の土田芳乃が鎌倉の小町通りに中国料理店・流鎗馬を開いたということで、店に招待された。9月15日の八幡宮での流鎗馬神事などを見た後店にも寄ってみた。芳乃の夫は病氣療養中で、コックや夫の弟などを紹介された。ヤブサメという名前の鳥も…。その後、店が定休日の日に特別料理をふるまってくれるという話になった。ところが店についてみると芳乃の姿は見えず、調理場の釜には釜茹でになったたらしき女性の死体が残されていた。この後連続殺人へと発展していく。冒頭の盛り上がりからすると、結末は…。